

校長室から

第10号

二宮金次郎の像について ~その2~

二宮尊徳（尊徳自身は終生その姓名を二宮金次郎と記していたが、本稿では以後、尊徳と表記する）に関しては多くの逸話が残っています。これらの逸話の多くは、門人（弟子）の富田高慶が著した尊徳の伝記『報徳期』（1881年、明治14年、尊徳の没後25年）を由来としています。ただし、尊徳は幼少期の頃について全く語らなかったため、高慶は村人から聞いた話を記したとしており、高慶自身信憑性は保証できないとしています。逸話を交えながら尊徳の生涯を追ってみましょう。

尊徳は1787年（天明7年）9月相模国足柄上郡栢山村（現在の神奈川県小田原市栢山）に、農民利右衛門の長男として生まれました。「祖父銀右衛門常に節儉を守り、家業に力をつくし、すこぶる富有を致せり、父利右衛門の世に至り、村人みなこれを善人と称す。民の求めに応じて、あるいは施し、あるいは貸し、数年にして家産を減じ、積財ことごとく散じ、衰貧すでにきわまる。……この時にあたって先生を生む。」とあります。さらに尊徳が5歳になった夏、酒匂川が氾濫し、父利右衛門の田んぼはすべて石河原となってしまいました。この時、すでに弟2人も生まれていました。飢饉が続けば、農村でもたくさんの餓死者が出た時代です。傾きかけた農家に生まれた尊徳は、今の私たちには思ってみることもできないような貧しさに苦しむ生活の中で育ったのでしょう。幼少年時代のこととして伝えられているいくつかの話はそのことを物語っています。

尊徳が12歳の時、病気の父に元気になってもらおうと、小さい手でわらじを作り、それを売っては一合の酒を買って来て、酒が大好きな父を喜ばせた。病気の父に代わって酒匂川の堤防の工事に出ていたが、大人なみの仕事ができないので、すまなく思い、夜遅くまでかかってわらじを作り、村人たちに提供した。

13歳の尊徳は、子守りの駄賃としてうけた200文の金で、気の毒な老人から植林の残りの松の苗200本を譲りうけて、酒匂川の堤防に植えた。

尊徳14歳、3年間病気でねこんでいた父利右衛門が亡くなった。母をたすけるため、夜の明けやらぬうちから1里（約4km）を超える道を山に入り、たき木を伐ってきて小田原の町へ売りに出かけた。（後に金次郎の像のモデルとなる）

尊徳16歳、母よしが亡くなった。尊徳は父利右衛門の兄の二宮萬兵衛家に、弟2人は母の里、川久保家にそれぞれひきとられた。

尊徳17歳、夜遅くに読書をしていると、伯父に「油がもったいない」としかられたので、油菜の種を土堤に植え、収穫した油を夜学の灯りに使った。田植えの後に、道に捨てられていた苗を拾い集め、荒地の水たまりに植え、手入れをして、秋には1俵あまりの米を収穫した。（小を積んで大を為す、積小為大の真理を自覚する）

この後、尊徳が伯父の家から、荒れはてたわが家へ帰ったのがいつのことであるかは正確にはわかりませんが、20歳の正月を一人で自分の家で迎えたといわれています。この間に、尊徳は様々なことを体験し、知識を身に付けていったのでした。（校長 池原英二）